

# I 「心齋橋地区」について

## 1. 「長堀川」と「長堀通り」

### (1) 「長堀川」

・「長堀川」は、東横堀川の末吉橋下流から分流して西に向かって流れ、西横堀川と交差したあと木津川の伯楽橋下流に注ぐ東西の堀川で、元和8年(1622)、伏見から移住した有力町人の三栖清兵衛、池田屋次郎兵衛、伊丹屋平右衛門、岡田新三(心齋)らが中心になって開削した。長さは約2.5km、幅は約30~40mと、文字通り長い堀川で、西横堀川から下流部は「西長堀川」と呼び分けることもある。また、全くの新規開削ではなく、開削以前にあった小河川を拡幅したものと推測されている。(寛永2年[16925]開削の説もある。)

・川の両岸に開発された町には開削者の名をとって、上流側から長堀次郎兵衛町・長堀心齋町・長堀平右衛門町・清兵衛町の町名が付けられ、明治5年(1872)の町名改称まで続いた。また、長堀川を境にして、上流部(西横堀川より東)の右岸(北部)を「船場」、左岸(南部)を「島之内」と呼び、下流部(西長堀川)については、右岸(北部)は「下船場」、左岸(南部)は「堀江」と呼ばれ、両岸には土佐や阿波などの材木問屋が多く立ち並んでいたほか、鰹座橋付近の左岸には土佐藩の蔵屋敷があった。

・堀川には、上流側から西横堀川までの間に、「安綿(ヤスワタ)橋」、「板屋橋」、「長堀橋」、「中橋」、「三休橋」、「心齋橋」、「佐野屋橋」が架けられ、西横堀川交点には「口」の字型に4つの橋(北から時計廻りに「上繫(ツナギ)橋」、「炭屋橋」、「下繫橋」、「吉野屋橋」)が架けられて「四ツ橋」と呼ばれた。このうち「三休橋」は、「中橋」と「心齋橋」の間に「長堀橋」を含めた3つの橋の人通りを緩和するため少し遅れて架けられたもので、「3つの橋を休ませる」意から名付けられたとされる。

また、「長堀橋」と「中橋」の間には、明治41年(1908)、医師の藤中泰によって架けられた「藤中橋」があり、御堂筋には当初、橋がなかったが拡幅時の昭和9年(1934)に「新橋」が架橋されている。

最上流の「安綿橋」は、貞享3年(1686)に安井九兵衛と綿屋某が共同で架けたもので、「佐野屋橋」は佐野屋弥平の架橋とされ、この橋の周辺には石屋が密集していた。

・昭和35年から西横堀川より上流の埋め立てが始められ、昭和39年(1964)に埋立完了した地上および地下2階に大阪市営「長堀駐車場」が設置された。下流の西長堀川は、昭和42年から埋立が開始されて昭和46年(1971)に埋立が完了、地上部分には、同48年に「長堀グリーンプラザ」(緑地帯)が設置された。

### (2) 「長堀通り」(国道308号)

・現在の「長堀通り」は、木津川に架かる伯楽橋の西詰交差点から今里交差点(今里筋)までの約5.9kmを指すが、その前身は長堀川北岸を通過していた「末吉橋通」で、長堀川の埋立により、末吉橋(東横堀川)以西の大半が幅員50mに拡幅され、道路中央に緑地帯や観光バス用の駐車場などが設けられた。

「末吉橋」は、東横堀川に架かる橋で、朱印船貿易で活躍した平野郷の豪商・末吉孫左衛門が架けたとされ、橋の西詰には末吉家の別邸があったとされる。

・この「通り」には、明治41年11月に市電が敷設され(明治43年3月に末吉橋~上本町2丁目間が延伸され、明治45年に玉造まで延伸)、昭和36年11月に廃止されてトロリーバスに転換されたが、それも昭和44年9月に廃止された。

・また、地下には「地下鉄・長堀鶴見緑地線」が走っている。

この路線は、平成2年(1990)に鶴見区の鶴見緑地で開催された「花博」に合わせて、京橋駅~鶴見緑地駅間が開業したもので、当初の路線名は「鶴見緑地線」であった。

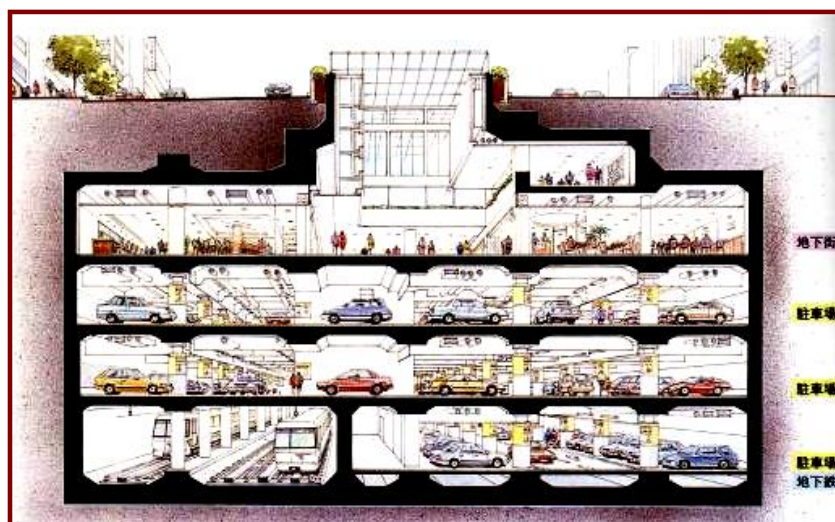
その後、平成8年に京橋駅から心齋橋駅まで延伸されて「長堀鶴見緑地線」に改称、そして、平成9年8月、門真南駅から大正駅までの全線が開通した。

計画当初は上町筋を経由する経路も検討されたが、大坂城の外濠や難波宮跡での地下工事は困難が予想され、森ノ宮駅で中央線と接続できる玉造筋ルートが選定された。

なお、この路線では、従来の車両より断面積が小さい日本初の鉄輪式リニアモーターミニ地下鉄が採用され、いち早く全駅に可動式ホーム柵が設置されている。

・四ツ橋交差点(四つ橋筋)~長堀橋交差点(堺筋)間には、地下街(「クリスタ長堀」)が

広がり、新橋交差点～末吉橋西詰交差点間には地下駐車場が設けられている。



「長堀川」埋立部分の地下構造

## 2. 「心齋橋筋」

### (1) 「心齋橋」と「心齋橋筋」

・心齋橋筋は、豊臣秀吉が慶長3年(1598)からの大坂城三ノ丸(大名屋敷地)造営に際し、域内にあった町人家の移転先として造成した船場地区の西端を大川端から南北に通る道筋で、最近の調査によれば、地理的に、かつて上町台地が大坂湾に落ち込む境界線にあるとされている。

・先に述べたように、元和2年(1616)から長堀川の開削が行われたが、この工事に関わった伏見商人・岡田心齋(1575～1639)が住まい近くに架けた橋であることから、その名に因み「心齋橋」と名付けられた。

岡田心齋は、その後、橋の付近に屋敷を構え、諸国物産を商うとともに川岸と道筋の開発・振興に努めた。(注 岡田心齋の祖父は織田信長に仕えた侍で、父の代に身分を捨てて京都伏見に移り住み、商人となって美濃屋と称した。)

### 「心齋橋」

・当初、長さ18間(約35m)、幅2間半(約4m)の木橋であった「心齋橋」は、その後、何回も架け替えられており、明治6年(1873)には文明開化の波にのりドイツから輸入した鉄製弓形トラス橋となった。さらに、明治41年(1908)末の市電軌道敷設を機に、石造りのアーチ橋に架け替えられることとなり、明治42年に完成した。この際に撤去されたトラス鉄橋は、いったん境川橋として転用されたが、現在は、鶴見緑地の「すずかけ橋」となり、日本に現存する最古の鉄橋として保存されている。また、石造りアーチ橋は、二重アーチのデザインが川面に映る姿から「眼鏡橋」とも呼ばれ、心齋橋筋のシンボルとして長く親しまれたが、長堀川の埋立により、昭和37年にその姿を消し、陸橋となった。そして、平成9年に地下ショッピングモール「クリスタ長堀」が完成し、長堀通りも陸橋から歩道により地上を横断する形となって、長堀通りの中央分離帯部分にかつての眼鏡橋の欄干と橋柱が保存されるとともにガス灯がモニュメントとして再現されている。

### 「心齋橋筋」

・現在の「心齋橋筋」は、土佐堀通から道頓堀川に架かる戎橋までの約2.5kmで、戎橋以南は南海難波駅に至る「戎橋筋」に接続している。そのうち南本町通以南の約1.5kmは、順慶町通までが「せんば心齋橋筋商店街」、順慶町通から長堀通までが「心齋橋筋北商店街」、長堀通以南の島之内地区は「心齋橋筋商店街」と3つのアーケード商店街が連なっている。

・江戸時代には新町の遊郭や道頓堀の芝居小屋への通り道として繁昌した。(新町から東へ心齋橋筋に通ずる順慶町通と道頓堀までの心齋橋筋には多くの夜店で賑わった。)

・心齋橋筋沿いは南北の町割りとなっており、江戸時代には、木挽町北之丁・木挽町中之丁・

木挽町南之丁・菊屋町が連なっていたが、明治5年(1872)に現在の町名となり、周防町筋を境に「心齋橋筋1丁目」と「心齋橋筋2丁目」となった。

## (2)「心齋橋筋商店街」

・長堀通の南側から宗右衛門町通まで、南北に約580mつづく心齋橋筋商店街の歴史は古く、18世紀半ばに「呉服屋松屋」(今の百貨店「大丸」)が店を出した頃には、心齋橋周辺に商店が集まり、江戸期を通して日本中の物資が集まる“大坂”における小売業の中心的役割を果たしてきた。延享5年(1748)刊『難波丸綱目』には、「ぬり物屋・書物屋・古道具や・経師や・琴三味線・かざりや・其外諸商売多し」とある。

明治・大正期には、大阪の発展とともに繁栄し「東の銀座、西の心齋橋」と並び称され、銀座をそぞろ歩く“銀ブラ”に対して“心ブラ”という言葉が生まれた。

・昭和天皇御即位を記念してアーケードと街路灯を新装され、昭和34年12月には皇太子御成婚記念事業としてアーケードがリニューアルされ、大理石のカラー舗装が施された。

・心齋橋2丁目についてみれば、戦前には75軒の店舗であったが、戦後の昭和34年には88軒となり、その中、戦前派は40軒、戦後派が48軒と半数以上が入れ替わっている。

・宮本又次氏は、「明治政府が税金を出してぜいたくに創り上げた東京の銀座に対し、心齋橋筋は庶民が繁華を求めて集まった自立発展の街区である。日曜日に人出が多く混雑するのが心齋橋筋だし、値下げ売り出しや抽選券、福引きがよく行われ、大売り出しは大阪の商法といえる。これは心齋橋筋が古来、誓文払いや“蛭子(エビス)ぎれ”の本場だったから当然であろう。」とされている。

### \*「大丸」

・享保2年(1717)、下村彦右衛門正啓が京都・伏見の生家で呉服店「大文字屋」を開業したのが始まり。

享保11年(1726)11月、心齋橋に進出して「松屋」を開店し、現金正札販売を始めた。

・大正9年(1920)、「株式会社大丸呉服店」となって、本店を心齋橋に置き、昭和3年(1928)には「株式会社大丸」に商号変更された。

・創業時の「大文字屋」の名は、京都五山の送り火の「大文字」にちなんで付けられたが、名古屋進出にあたって、「丸」の中に「大」の字をあしらった商標を使い始め、広く一般に「大丸」と呼ばれるようになったとされる。

「丸」は宇宙を表し、「大」の字は、「一」と「人」を組み合わせで成り立っていることから、「天下一の商人になろう」という志が示されている。

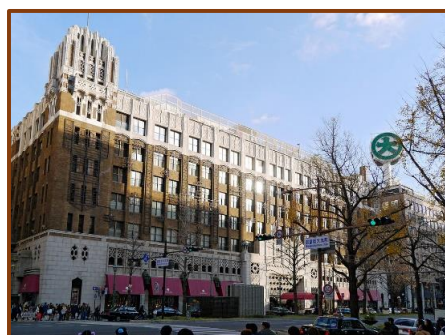
なお、看板文字・社章の「大」の字の3画には、おめでたい「七五三」にちなんで左から7・5・3本のヒゲが出されている。(「一」の左端に3本、「人」の左下に5本、右下に7本)

・「先義後利」(義を先にして利を後にする者は栄える)という理念を称え、社会との調和を重んじた経営に徹したことから、天保8年(1837)の「大塩平八郎の乱」においても、「大丸は義商なり、犯すなかれ」として焼き討ちを免れたとされており、幕末期には新選組隊士の服が大丸を通して調達されたという話が伝わっている

・大正9年、失火で店舗が全焼したため、大正11年にウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計による店舗再興工事が完成し、大正14年9月には第2期工事が竣工して、中央玄関上部にピーコック(孔雀=大丸のシンボル)のテラコッタ(陶製)が掲げられた。さらに昭和8年(1933)には第3期工事としてアール・デコの重厚な近代建築の本館が完成し、本館(地上8階、地下2階)と南館の2館体制となった。

\* 平成21年11月には隣接する「そごう心齋橋本店」が営業不振で閉店したため、建物を買い取って大丸北館とし、店舗面積は77千㎡の最大規模となった。

・平成27年12月、建て替えのため本館を一時閉館して北館と南館の2館体制で営業継続されてきたが、令和元年9月に新本館がリニューアルオープンした後、北館の改装工事に入っており、令和3年(2021)春に関係会社の「パルコ」を核テナントとする新たなスタイルに



生まれ変わる予定になっている。なお、新本館(地上11階、地下3階)の低層階部分には旧本館ビル(地上8階・地下2階建て)の外観が保存されている。

・経営面では、平成19年に「株式会社松坂屋」と経営統合し、持株会社「J.フロント リテイリング株式会社」が設立されている、



#### \*「そごう心齋橋本店」 百貨店

・天保元年(1830)、初代・十合伊兵衛が坐摩神社・南隣で古着屋の「大和屋」を開業したのが始まりで、明治5年には呉服店へ転換し、明治10年(1877)に心齋橋に移って「十合呉服店」と改称した。

・ロゴマークの「まるちきり」は、初代十合伊兵衛の生家・絹屋の家紋である「ちきり」(縦糸を巻くための織機の付属部品)を丸で囲んだもので、「ちきり」はまた「契り」という言葉を連想させ、「客との結びつきを末長く大切に」といった意味も含まれている。

・その後、大正8年(1919)4月には、店舗を拡張して地上4階・地下1階建てビルを新築し、昭和8年(1933)には阪神三宮駅ビルに「神戸そごう」を設け、百貨店として生まれ変わった。(注「神戸そごう」は、その後業務資本提携した阪急阪神東宝グループ(H20)との話し合いがまとまり、令和元年10月から「神戸阪急」に屋号変更した。)

・昭和10年(1935)9月、心齋橋本店が村野藤吾設計による地上8階・地下3階建ての近代ビルに建て替えられた。ガラスブロックを活用した美しい垂直線を強調した白亜のビルで、モダニズム建築の傑作と評価され、店内には700名収容の劇場や茶室、貴賓室、食堂など売場以外の機能も併設され、新しく屋上遊園地の「そごうパーク」も設置された。

大戦では戦火を免れ、終戦後は進駐軍に徴用されてPX(進駐軍とその家族向けの売店)となったが、昭和27年(1952)6月に接收解除され、営業を再開した。

・その後、国内をはじめ海外にも店舗展開がはかられていたが、経営は厳しくなり、平成12年7月には民事再生法の適用を申請し事実上倒産に至った。

この際、心齋橋店については、「撤退でなく、そごう発祥の地にふさわしい店舗として再生させる」として、昭和10年建築の建物も解体し一旦、閉店されたが、平成15年に再生計画を決定し、平成17年9月にはビル(地上14階・地下2階建て)も新築して新装開店を行った。しかし、その後も売上不振が続いて、平成21年8月には閉店せざるを得ない状況に追い込まれ、建物は南隣の「大丸」が買い取って、同年11月に「大丸心齋橋店・北館」としてリニューアルした。



「大丸・北館」

#### \*「高島屋 大阪店」

・天保2年(1831)、初代・飯田新七が、京都烏丸松原で古着・木綿商「たかしまや」を創業し、明治31年(1898)、心齋橋筋2丁目の丸亀屋(\*)のあとに「飯田呉服店高島屋」を開業した。

(飯田家は、江州高島郡の出身であることから、屋号を「高島屋」とした。)

・大正11年(1922)10月、堺筋鰻谷南通交差点南東角に移転(「高島屋長堀店」=地上7階・地下1階)し、昭和7年(1932)に難波の南海店が開店されたのに伴い、昭和14年7月、南海店に統合されて閉店した。なお、高島屋が長堀橋に移転した跡は「丸信雑貨店」となった。

⑨「丸亀屋」は、田村太兵衛の開店した呉服店で、3代目当主は丸亀屋を番頭ぐるみで飯田呉服店に売却して初代大阪市長選挙立候補し、住友吉左衛門を抑えて当選した。(在職:1898~1901)

#### \*「白木屋」

・創業者は大村彦太郎(近江商人)で、京都に材木店を開き、その後、小間物店を経て元禄期には大呉服店に成長した。大阪への進出は明治に入ってからで、明治36年(1903)10月、心齋橋2丁目(周防町と八幡筋の間)に支店を開設して呉服物販売を始め、大正10年(1921)10月には堺筋(備後町1丁目)に9階建ての百貨店ビルを新設して移転した。

心齋橋筋の跡地は、洋品店の「キンシ堂」になっている。

#### \*「心齋橋松竹」

・昭和14年(1939)2月、心齋橋筋「十合百貨店」の北隣に開館した松竹系の映画館。

#### \*「心齋橋2丁目劇場」

心齋橋筋2丁目5(周防町・角)

・昭和61年4月にオープンした吉本興業運営の劇場で、ダウンタウン、今田耕司、千原兄弟、ナインティナイン、雨上がり決死隊などを輩出した。

もとは昭和35年竣工の吉本ビル内に設けられた「日立ホール」(のち「南海ホール」)であったものを、「心齋橋2丁目劇場」をして改装された。

・平成11年3月、ビルの老朽化に伴い建て替えが決定されて閉館し、平成13年に地上8階・地下2階建ての「吉本興業ビル心齋橋1号館」(現・「心齋橋GATE」)となった。

現在は1・2階に「マツモトキヨシ」の心齋橋南店が入っている。

#### \*「心齋橋パルコ」と「心齋橋ZERO GATE」

心齋橋筋1丁目9

・昭和50年竣工の「心齋橋パルコ」は、地上8階・地下1階の商業ビルで、「心齋橋ロフト」を核に、8階にはライブハウスもあったが、平成23年9月、老朽化で閉館した。

・その跡地に平成25年4月、地上4階・地下2階の新ビル「心齋橋ZERO GATE」が竣工し、スウェーデンのカジュアル衣料チェーン「H&M」が国内最大規模の直営店を構えている。

#### \*「キュープラザ心齋橋」(「ラ・ポルト心齋橋」)

心齋橋筋1丁目1(長堀通り)

もと、「ソニータワー」

・心齋橋南詰東に、ソニーが昭和51年にエレクトロニクス製品ショールームとして「ソニータワー」をオープンさせたが、平成16年、梅田エリアに新しいブランド拠点を開設することになって売却され、平成19年11月、スペインのアパレルブランド・「ZARA」直営店を核テナント(地下1階から3階)とした店舗ビル「ラ・ポルト心齋橋」(地上8階・地下1階)が竣工したが、

その後、核テナントの「ZARA」が、心齋橋商店街の三ツ寺通り南側に移転して、そのあとにドラッグストア「ココカラファイン」の店舗となり、ビル自体も平成26年2月に東急不動産に売却され、「キュープラザ心齋橋」と改称された。

・「ソニータワー」は、黒川紀章の設計による地上10階・地下2階建てのタワービルで、シースルーのエレベーターを備え、南西壁に9個の直方体が張り出してトイレが設置されている。地下1階に、平成9年5月開設の「心齋橋シネマ・ドゥ(Deux)」(ペアシート74席)があったが、平成16年10月に閉館した。

\*「KPOキリンプラザ大阪」と「ラズ心齋橋」 宗右衛門7

・戎橋の北東詰、もと「キリン会館」の跡地に昭和62年10月に建設された地上7階(塔屋1階)・地下1階建て複合文化ビルで、4階・6階にギャラリーがあり、飲食店のほか1階には地ビール工場があった。

・平成19年10月に閉鎖され、平成22年3月、地上7階・地下1階建て商業ビル「ラズ心齋橋」が竣工し、1～3階にスウェーデンのアパレル「H&M」が関西初進出した。

\*その他、心齋橋筋商店街の主な店舗

・中には江戸時代に開業した店舗や老舗店も多く、飲食店を含めた多業種の店舗が軒を連ねているが、最近では、海外ブランドの直営店も多くなり、東南アジアをはじめとした海外旅行客向けの美容品や生活用薬剤を扱う薬局チェーン店(「ダイコクドラッグ」ほか多数)のほか、「ディズニーストア」・「サンリオギャラリー」といった店も並び、平日から若者や多くの海外旅行客が通りを埋めている。

きもの「小大丸」

・初代・白井忠三郎は大和郡山の出身で、明和元年(1764)に二ツ井戸界隈で古着商を開業し、天明5年(1785)に「大和屋」の屋号で菊屋町(心齋橋)に進出し、明治2年(1869)9月頃に店舗を東側の現在地に移した。

・大和出身であることから、大の字を丸で囲ったロゴマークを使って、大丸と呼ばれていたが、同じロゴマークの「大文字屋」(現・大丸百貨店)と区別するため、お客からは「小さい大丸」=「小大丸」のニックネームで呼ばれていたため、明治32年に屋号を「小大丸」と改めた。

・昭和38年(1963)4月、5階建ての小大丸ビルが竣工。3階には画廊と画材店、絵画教室を構える「小大丸画廊」が、平成6年にオープンしている。

・北隣には、昭和5年(1963)開店の「不二家洋菓子店」がある。

寝具「西川」

・初代・西川仁右衛門は近江八幡の生まれで、永禄9年(1566)、19歳の時に当地で蚊帳の商売を始めたのが、その創業とされる。明治9年(1876)、大阪・本町に大阪支店を開設して蒲団も取扱い、昭和16年(1941)には現在地に心齋橋支店を置き、昭和22年に株式会社西川(現・株式会社心齋橋西川)となって、現在に至る。

「丹平」

・丹波出身の森平兵衛が「丹平足袋店」を構えていたが、明治27年から売薬業に転じ、「心齋橋八幡筋入・元祖・今治水本家・森玉林堂」の看板を掲げた。大正8年(1819)、北隣の高島屋飯田呉服店からの出火で類焼し、順慶町心齋橋筋東入に丹平商会本店を新築し移転した。焼け跡には、「丹平ハウス」が建設され、薬・化粧品のほかキャンディ、ソーダー、アイスクリーム等を販売し、心齋橋筋の一名物になっていた。

喫茶・レストラン「ミツヤ」

・創業者は小儀米蔵(父親が明治30年代後半に六甲山の氷を運んで売る店を開き、大正10年に電動式氷削機を考案して「かき氷」を始める)で、昭和18年(1943)に福島で甘党喫茶「ミツヤ」を開店し、「みつ豆」に餡をトッピングした「あんみつ」を考案して繁昌した。そして、昭和22年に現在の本店である喫茶・レストラン「心齋橋ミツヤ」を開店し、熱々の「鉄板スパゲティ」は今も看板メニューになっている。

### 御茶所「宇治園」

・創業は、明治38年(1905)で、京都府山城町において「山庄」という屋号で、茶製造・卸・小売業を始める(茶の行商は明治2年から)。

昭和16年(1941)に大阪に進出し玉造に販売所を設けて屋号を「宇治園」に改めたあと、昭和19年(1944)、心齋橋筋商店街に本店を開設した。

### お茶「宇治香園」

・慶應元年(1865)に初代・小嶋清七が京都山城にて茶の行商を開始。昭和15年(1940)、大阪阿倍野に支店を開き、次いで、昭和21年(1946)、大阪心齋橋店を開店した。

平成15年には店舗を増床改装し、日本茶専門の喫茶を開設した。

### 「カステラ銀装」

・長崎に本店を置く「文明堂」から暖簾分けされ、昭和27年(1952)8月、心齋橋筋商店街で創業したもので、カステラ業界で初のスライスパック化に成功し、カステラをより手軽なお菓子とした。

大丸百貨店向いのレトロな2階建て建物で、2階に直営喫茶「カフェ ラ・サール」がある。

### 昆布「松前屋」

・明治45年(1912)、「松前昆布本舗」として創業し、大正6年(1917)、心齋橋に出店。

昭和25年(1950)株式会社松前屋となり、心齋橋店に本店を置く。

・松前屋の由来は、「昆布は北海道、北海道は松前」による。

### 「三木楽器」

・江戸時代末期に書籍業として創業し、明治21年(1888)に楽器部を創設してヤマハオルガンの販売を開始した。昭和21年(1946)、心齋橋店を開設。3～5階にヤマハ音楽教室を併設している。

### 真珠宝石「仲庭」… 明治25年(1892)創業の宝石店

「テーラー カツラ(KATSURA)」… 大正12年(1923)創業の紳士服オーダーメイド店。

「藤井呉服店」… 明治5年(1872)京町堀で創業。昭和21年(1946)心齋橋に開店。

「中尾書店」… 昭和42年(1967)開業の古書店。店主の父は「中尾松泉堂」創業者。

履物「てんぐ」… 明治27年(1894)、心齋橋筋で創業

帽子「カクマツヤ」… はじめてマネキン人形とネオンを使った店として知られる。

### 「芝翫香」

心齋橋筋1丁目8

・明治3年(1870)、平野町の小間物商「加賀屋」に丁稚奉公していた初代・木下金助が暖簾分けされて、大丸呉服店の向いに「芝翫香」を開店した。

(木下夫妻は、明治42年、総石作りに架け替えられた心齋橋の渡初めに招かれた。)

・「芝翫香」の名は、加賀屋が初代・中村芝翫(歌右衛門)好みの「梅ヶ香」(白粉)を扱っていたことに因んだものとされる。

・明治時代に、小間物から鼈甲・珊瑚の小間物を取扱うようになり、現在は宝飾品・貴金属・袋物を中心に販売。大正12年に清水町南入る東側に洋風建築の新店舗に移った。

・平成21年に御堂筋(北九宝寺町4丁目)へ移転し、現在に至っている。

「宝美堂」… 昭和30年(1955)創業の高級時計店。ブランド品の買取も行う

\*その他 … かつてあった江戸時代創業の主な老舗店

「泉勘」(小間物・おしろい) … 宝永年間(1704～)に住友家別家の杉本勘七が創業。

「みのや」(扇子) … 弘化元年(1844)創業。

「をぐらや」(びんつけ油) … 寛政元年(1789)創業。

「錫半」(錫器) … 正徳4年(1714)、錫屋半兵衛が創業した老舗だが、平成8年に廃業。

\*ブランドショップは別掲。